時代加ゝ見廿五編

芝林堂梓

へ13
3756
9

仲之町ノ仮宅

若狭屋
ひこのすけ

時代鏡廿五編下冊

葵亭北國真画

時代鏡廿五編上之巻

一番北梅

雲門胡餅
趙州茶

今戸
拈華
庵

葵亭北国画

雪月花
茶談
時代鏡
廿五編上
廿五編下
仮題曲五國品
國貞画

春水作
國貞画
北雪美談
時代鏡
廿六編上
廿六編下
作題典之國

北雪美談時代鏡
廿七編下
芳林堂
春木作
國貞画
廿七編上

門へ13
3756
9

時代繪

二十七編の下

為永春水記

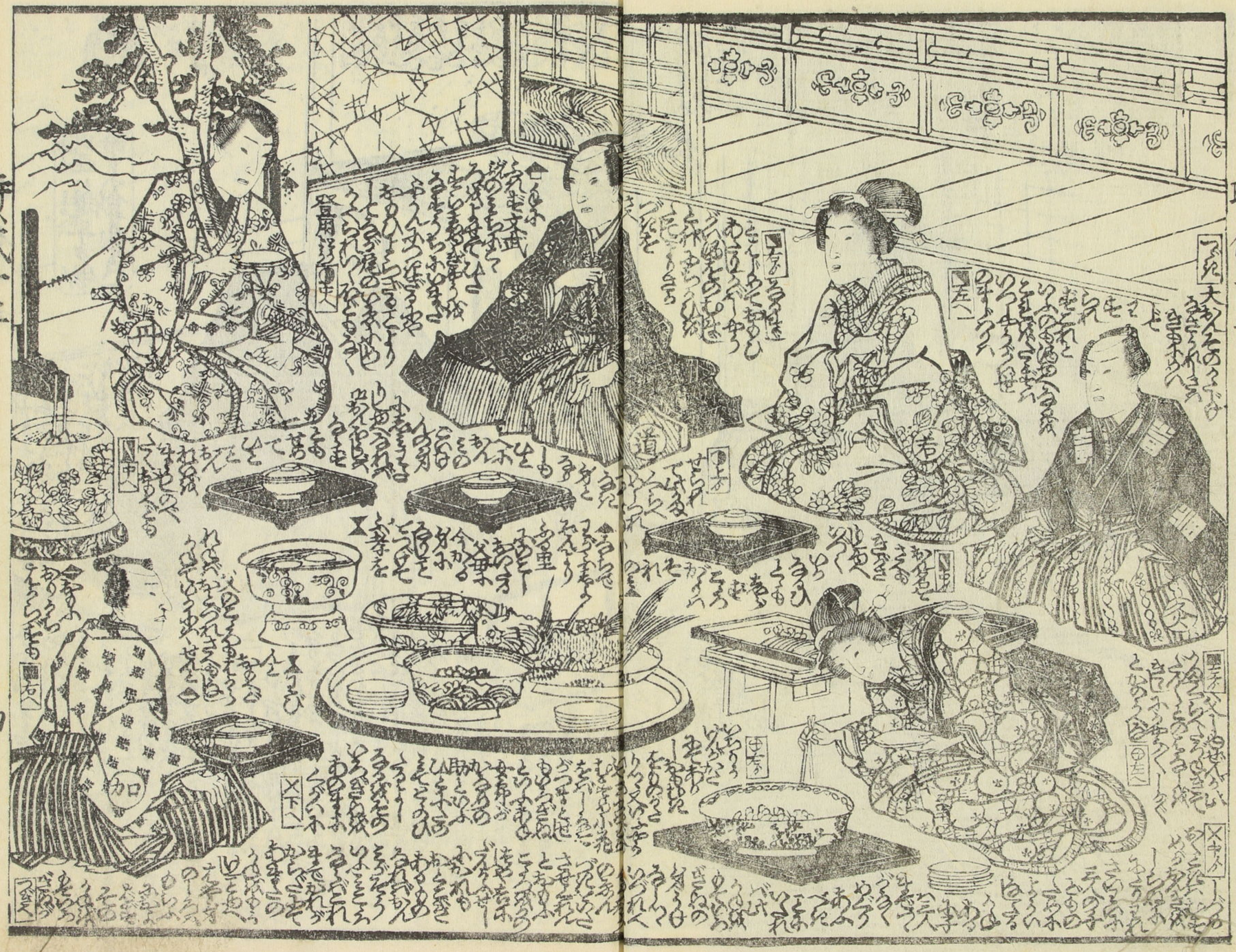
孟林堂梓

大約稗史を綴んに豫腹藁に。恁ひゆゝらゝ措くるも。偖筆に採るに至りゝ。後とゆて先に加え右と左りに做を支多うり。爾ば這前廿四編の幕と。かゝんとする前に那蜂澤の花作が小萩の跡と追行すゞゆて。筆に採るゝめて閣ゝゝ今道平ぐ物語と編も果さば小萩が。うへに暨さんといふ赴向るゝ。恁まるときに餘談ふのゝ只。徒に編數嵩て大貫目ゝる多賀の話ハさるゞ忘ゝ。るゝゝ案を轉じて尾上助の妻子の傳ふるせるゝ。總て僕が拙作。るゝ這物語と夾綴りて又那話ふ移るゝど夫等の類いと多ゝ。看官前後と讀返ゝゝ宜ゝゝ熟覽と願ふふこそ

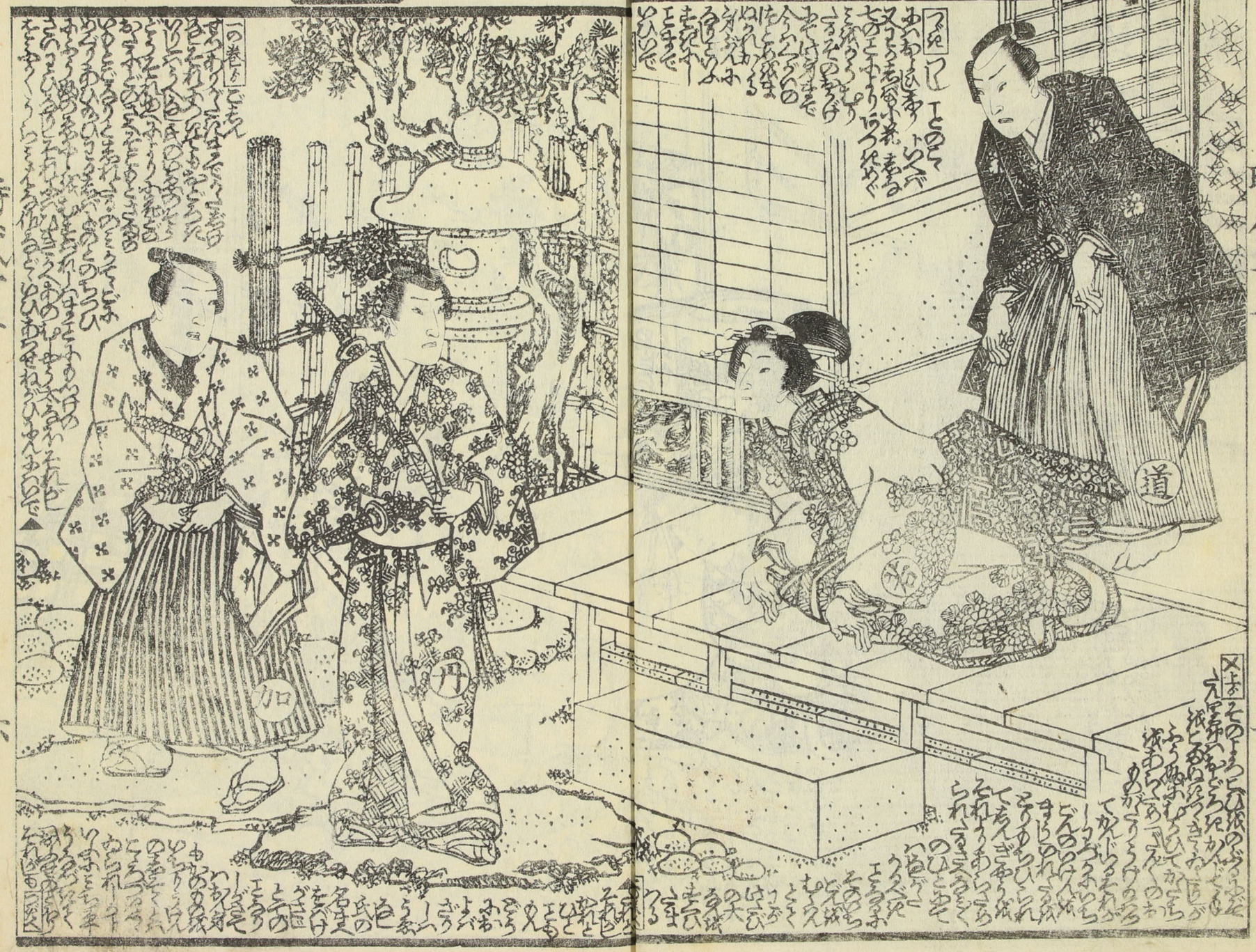
壬戌孟春
吉旦新鐫

時代十五
刈根の方
時代十五

大領正方

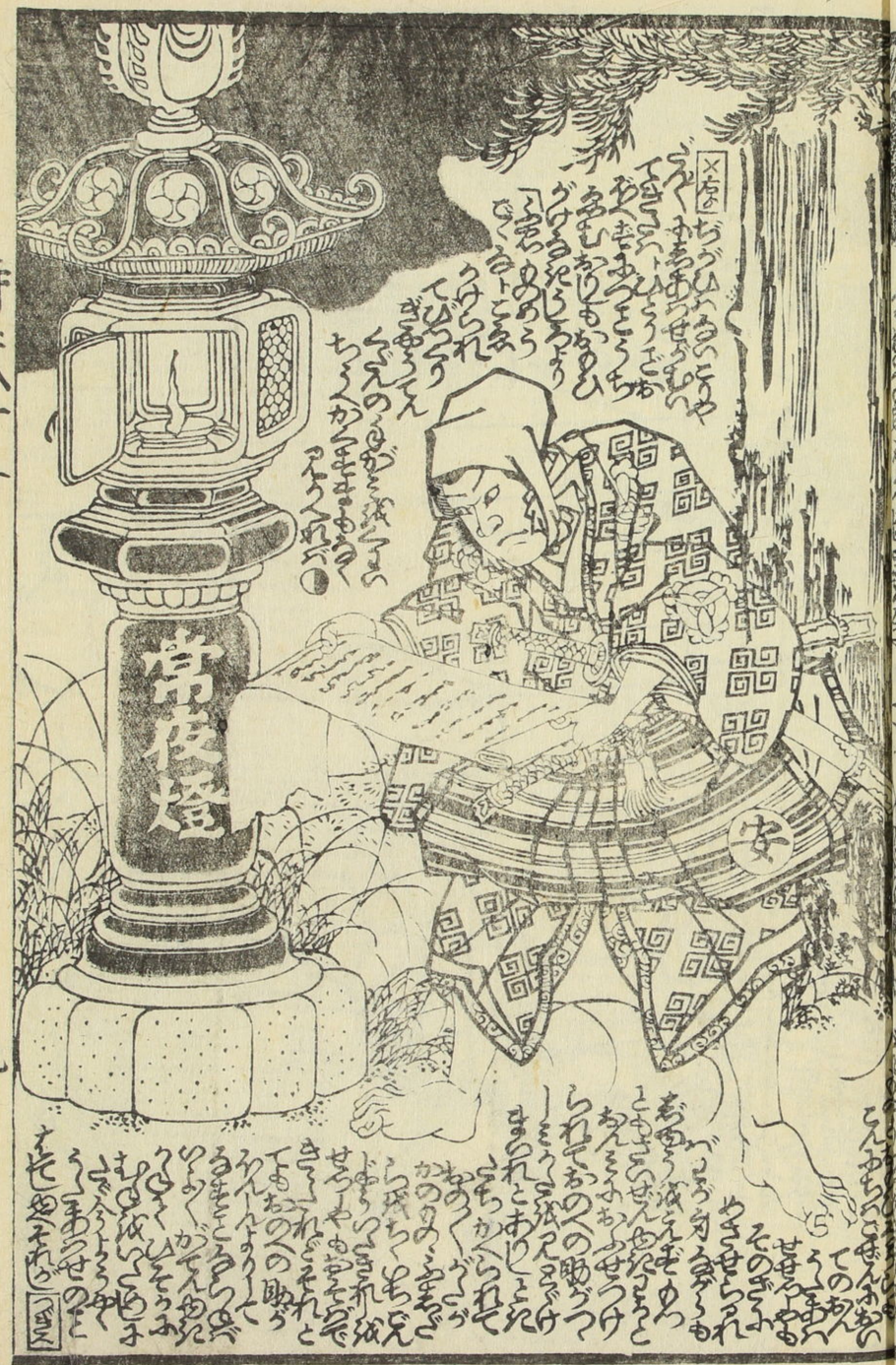


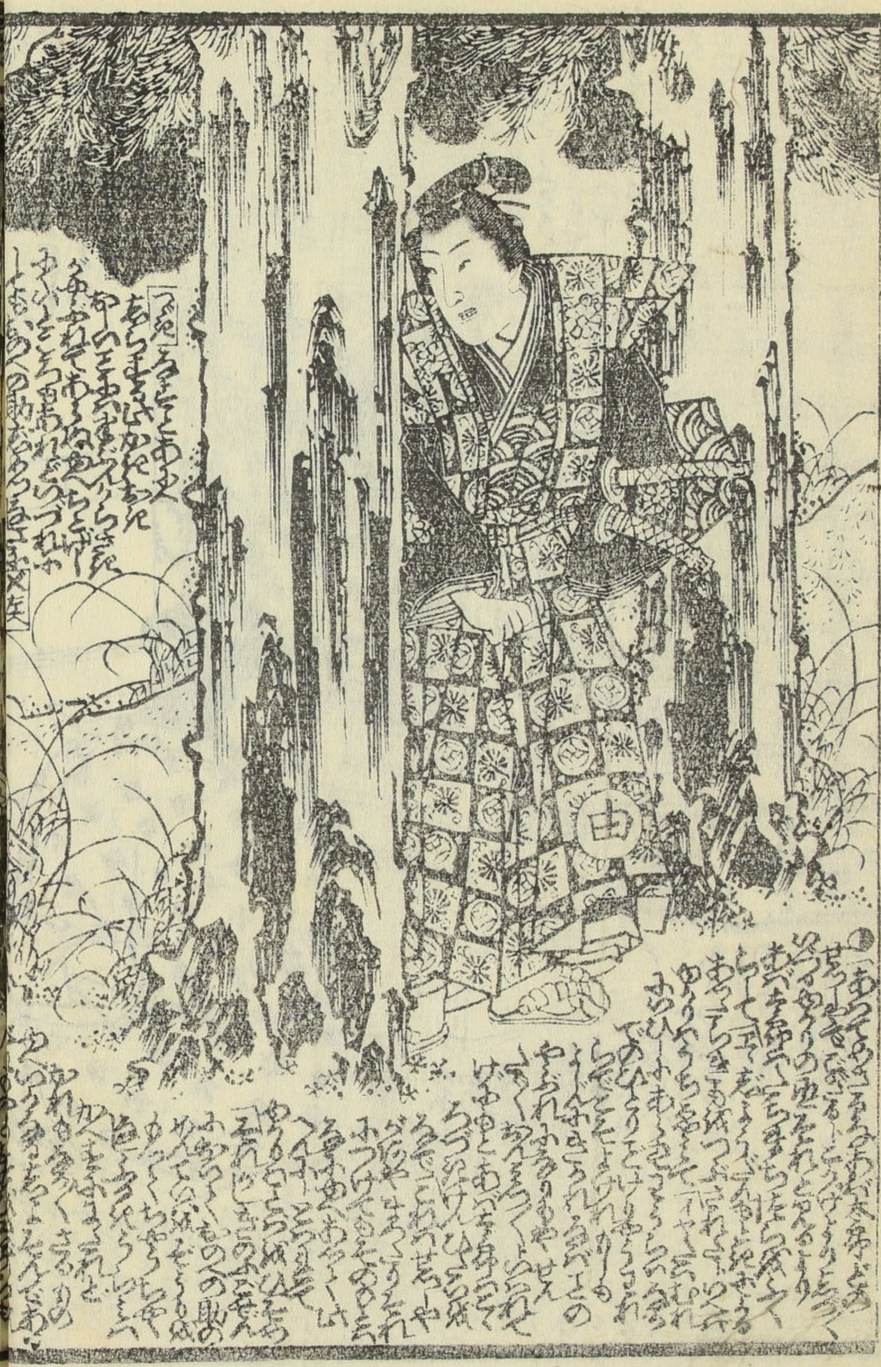
此画八道平ノ物語リヲ合ス見ル
主
客

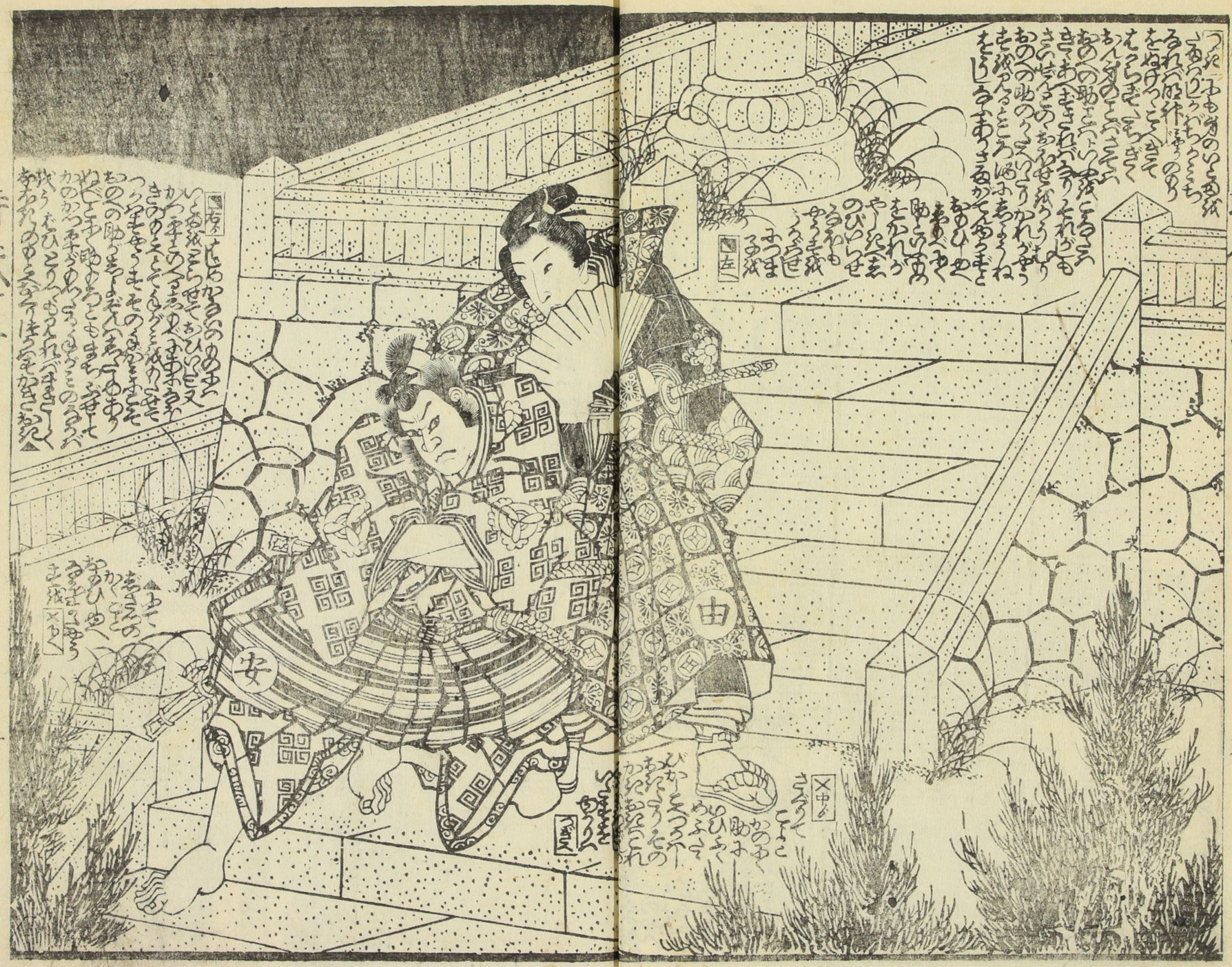

二
道
加
丹

憲安多里
老
カロ
丹
六

丹
加

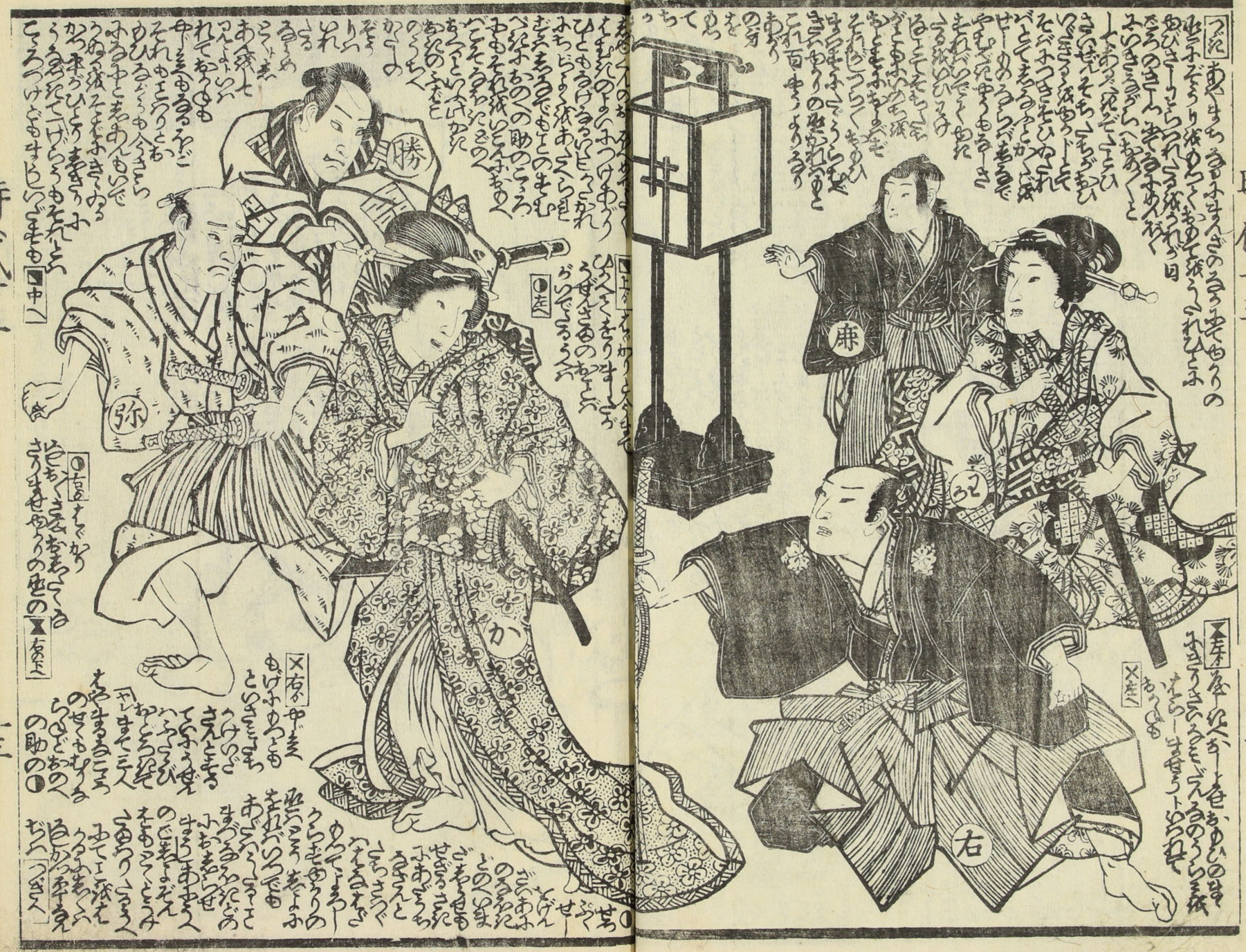

常夜燈
安


由


安
由

春水作國貞画

康
ろ
か
左
勝
弥


康
ろと
右
勝
弥
か

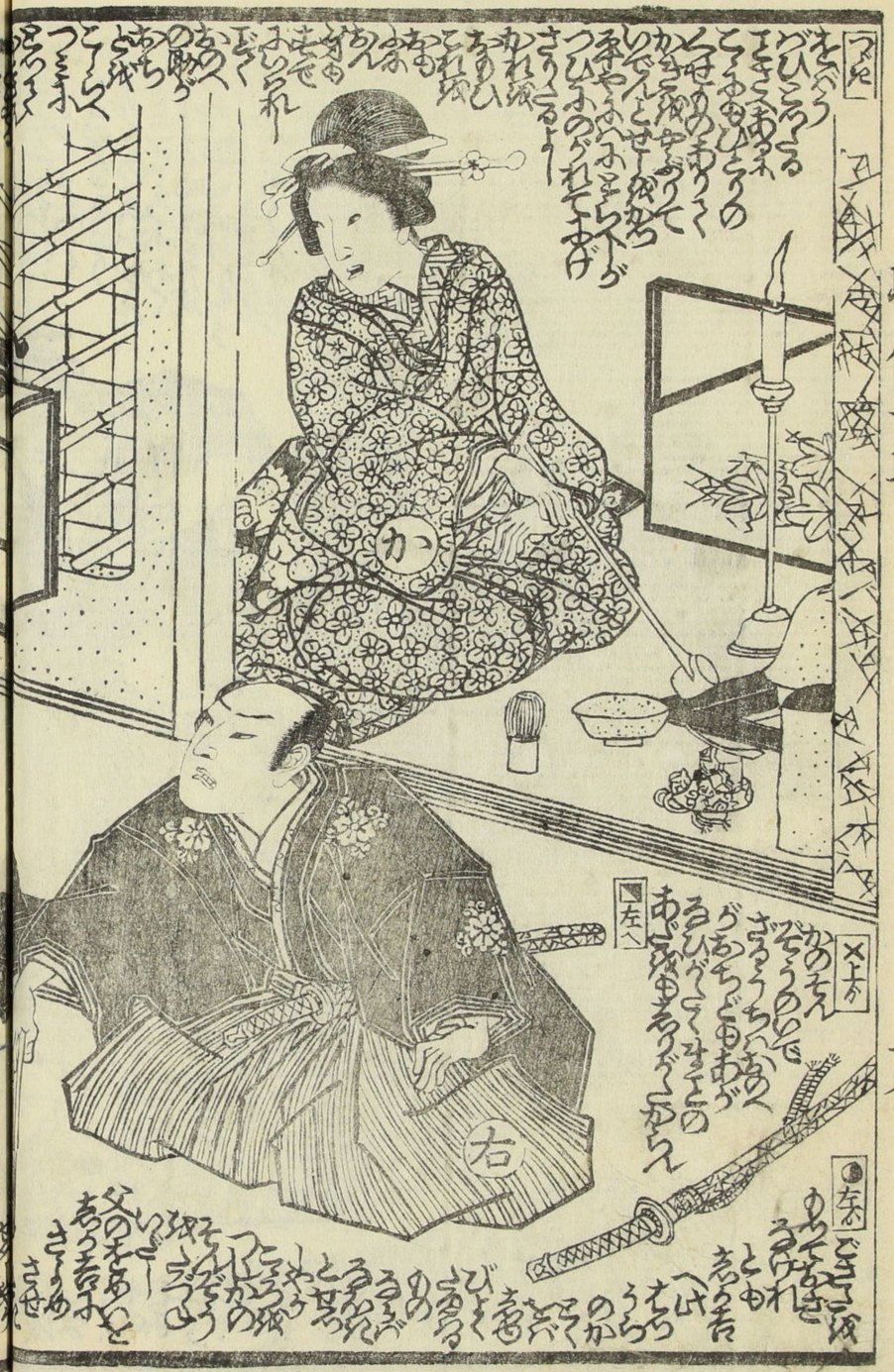
勝
由

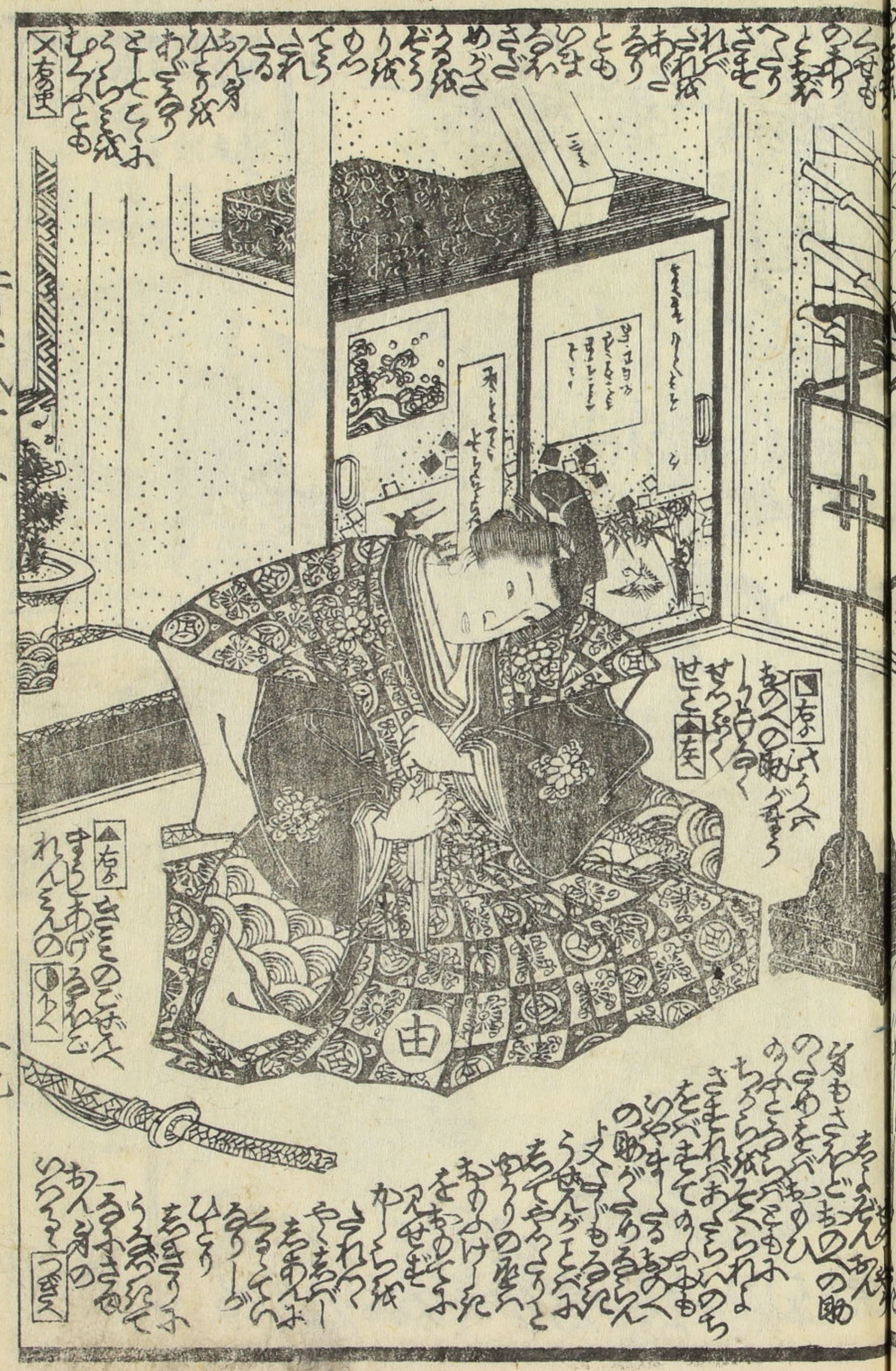
由
右

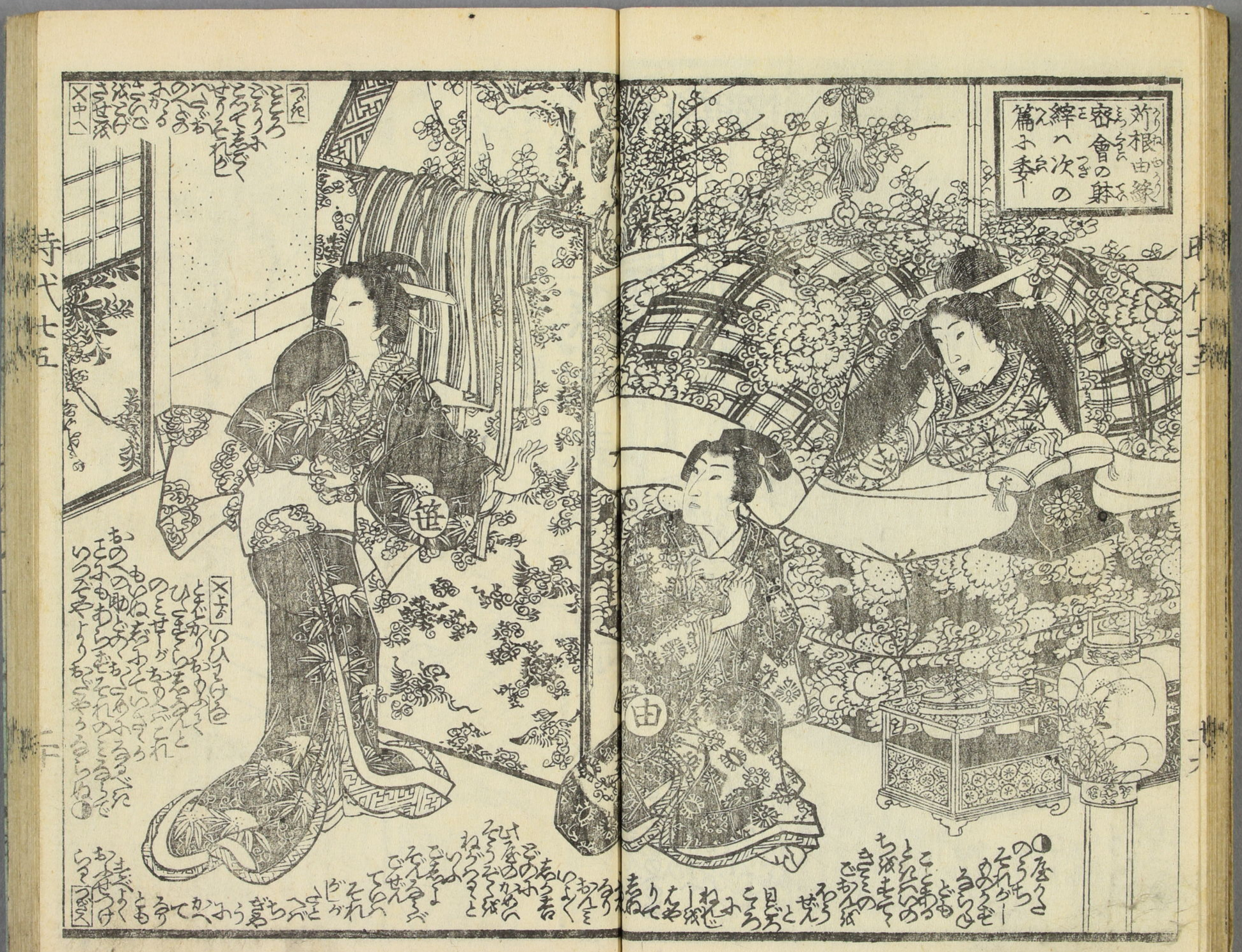
か
右
由

右
由
か
康

弥
右
左
右
由
兼
か


か
右


由


竹根由縁容會の躰
緯へ次の篇ゝ委し
笹
由

○四十海年の飛ハ塩ふるも素より無弾ものん信哉飛のあるハ

○生屋の汁と知あ月ハ出無弾郷の文机の信鮮ちくだやまつて

○油と偽り思ひ出ひ東やや眠りてはくぶる我者人ハ生つく

○古代状笑ふその者ハ乃ぶ〻うつ無成金ハ尚生ふとまる

○其男ハ又乃ぶまで鳴人ハ人ハ家ハ我戦墨ハ虚名ハ

○汚ふるもいつまで前の一掬ぶも帰ハ初のたくまく動儀の塔

○ふるれと復例の時代かく夏の嗣輯をふのまち

○文久二ふのえ戌のとしハ 為永春水考ふるまま

真葛の亀吳
獄ケ
洞右衛門

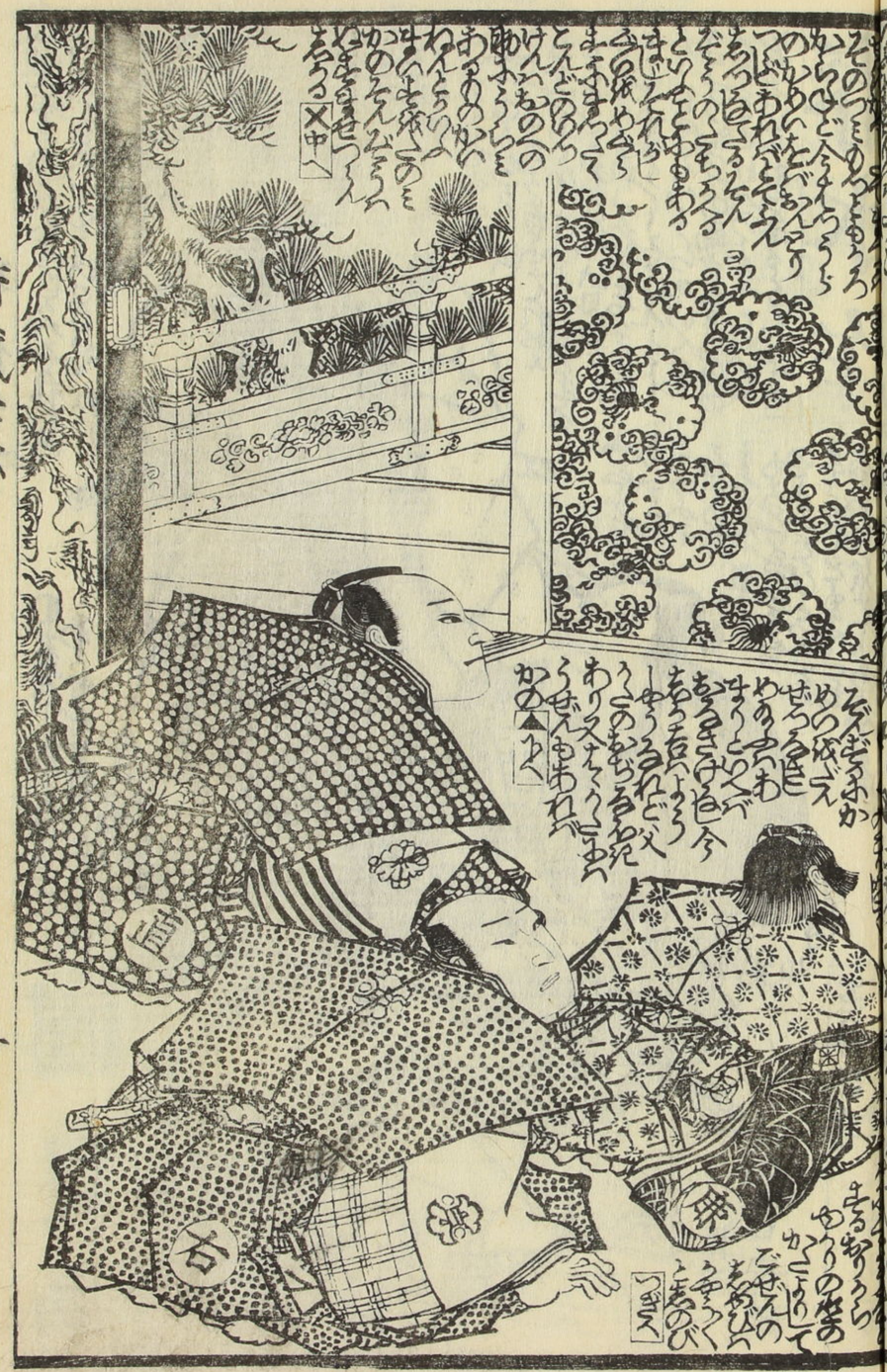
頓足羽太郎
洞右門女兒折鬼
越久野次郎
船板穴藏
下奴出子介

敷
直
右

二
右
直
數

正
由
花

若
カ
東
右
直
茶



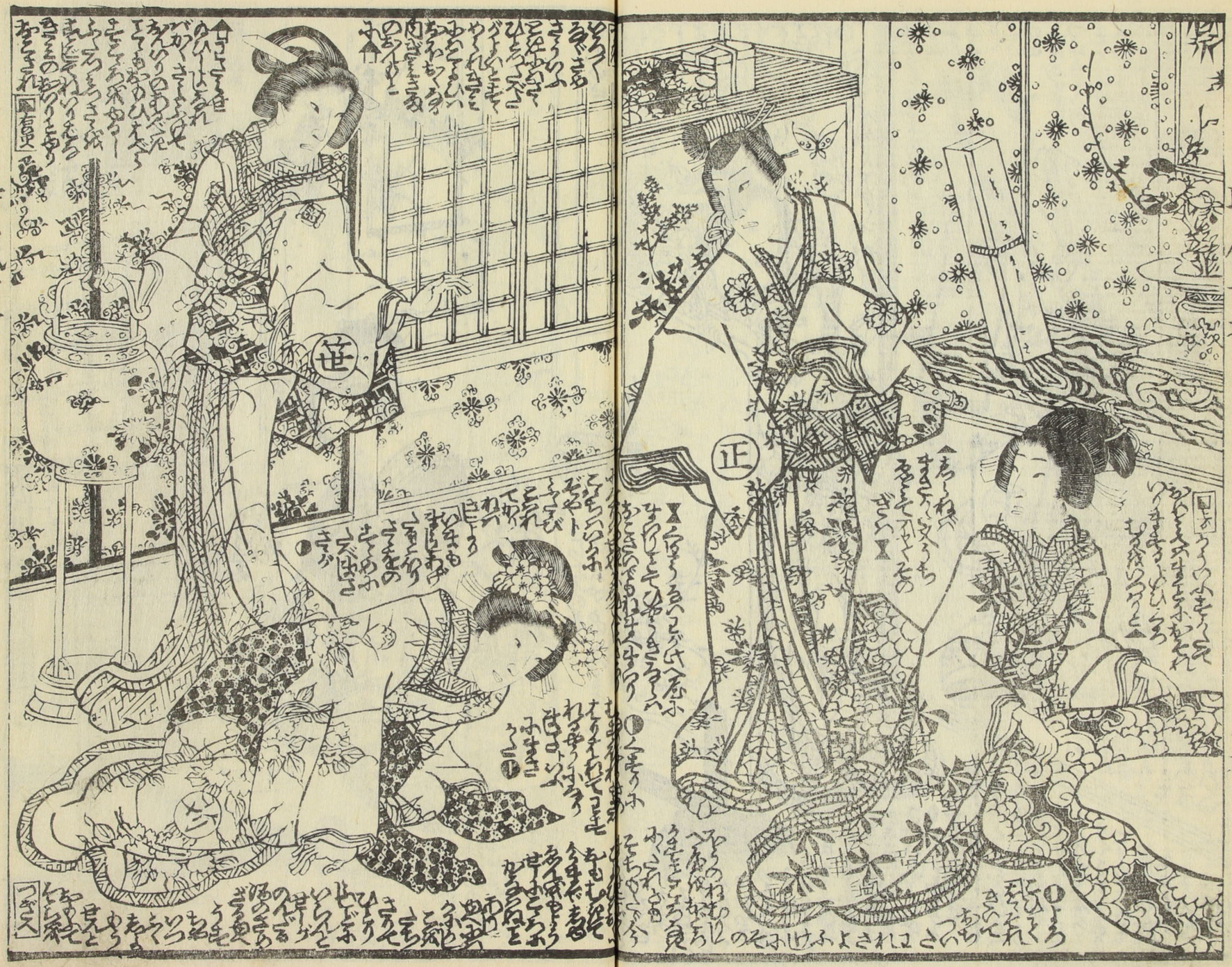
國貞画

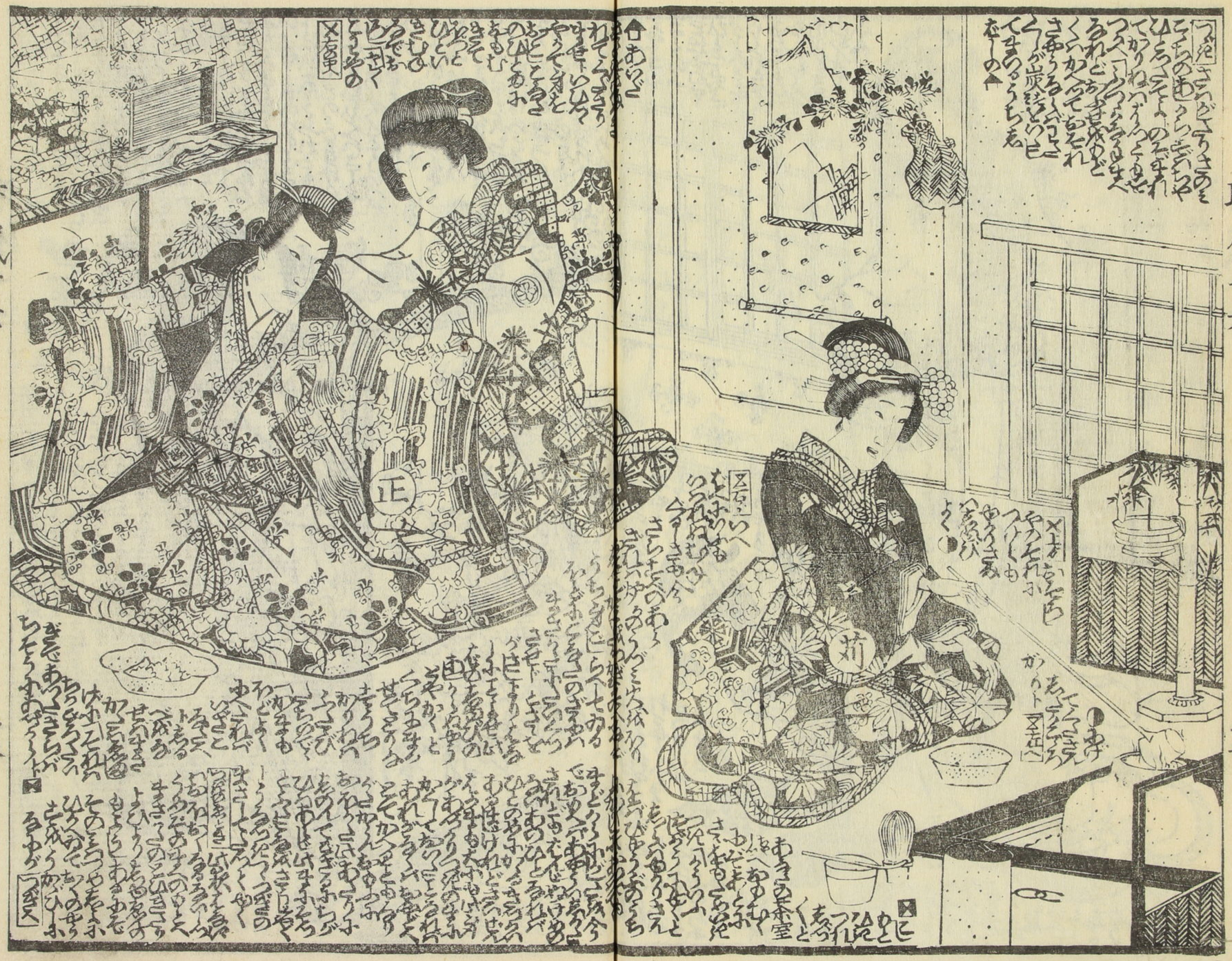
由
苅
笹

竹
由
笹

由
笹

由
折
笹
正


笹
正

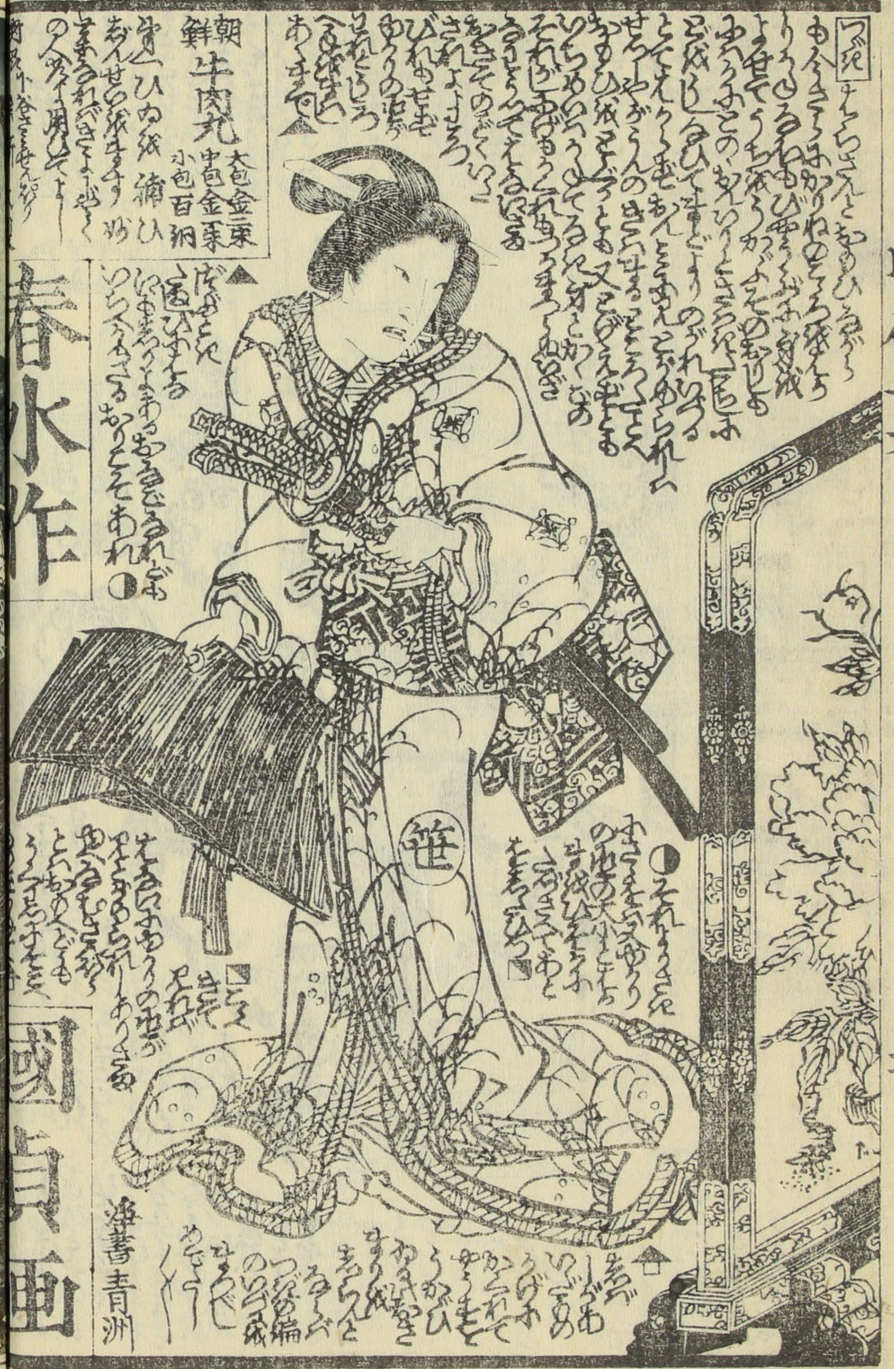

正
新

花

由

花

人生五十年譬バ一日の戯場のあとゝど実や毋の胎内より生出ル
發端より命終るの大詰まで大千世界の本舞臺ハ善悪邪正の
両花道表ハ忠孝の看板ハ出せど心の樂屋こゝのゝ仕打ハ

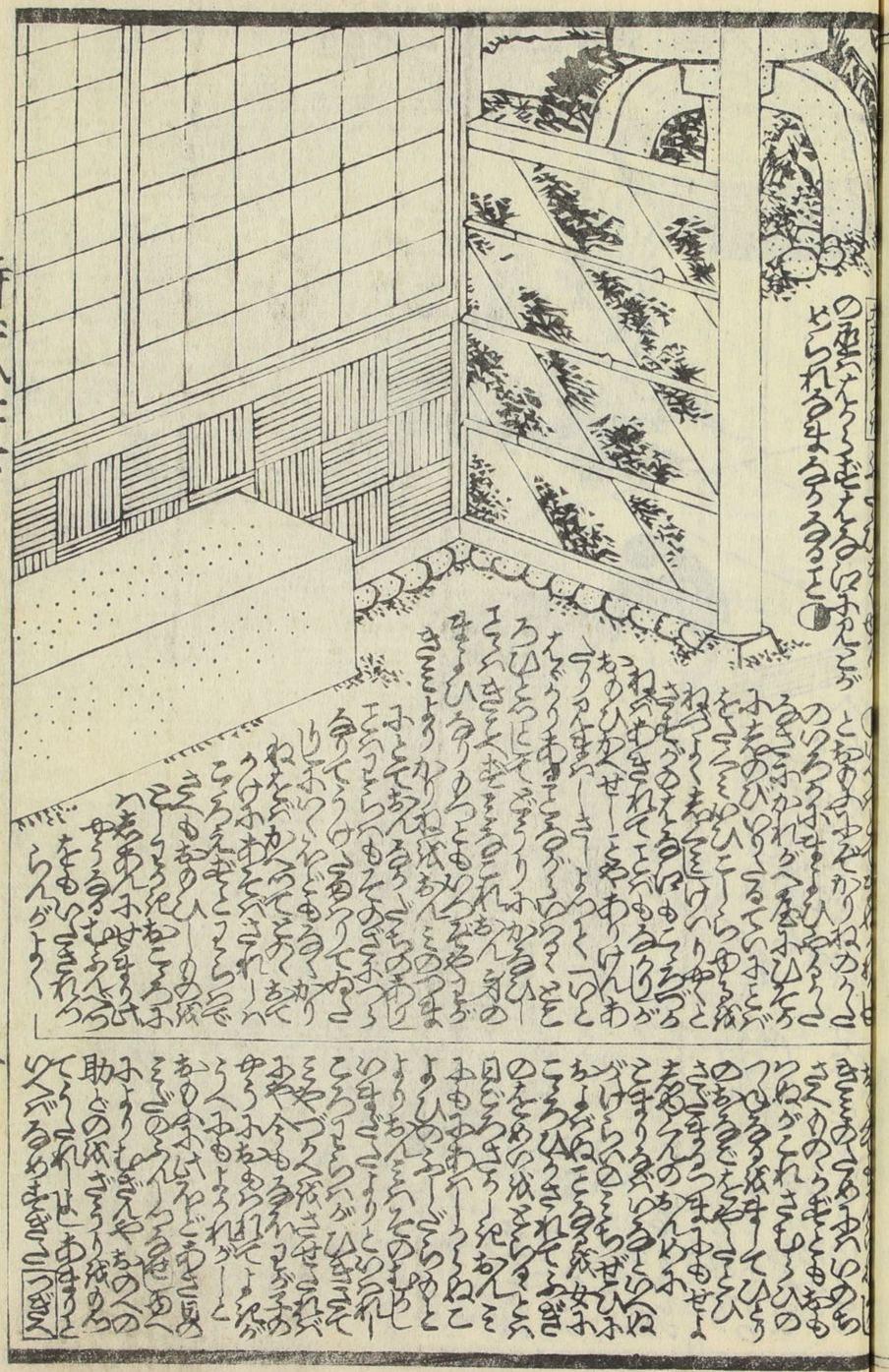


曲線之允
春辰
箱根の方
大の用
大須賀
正方

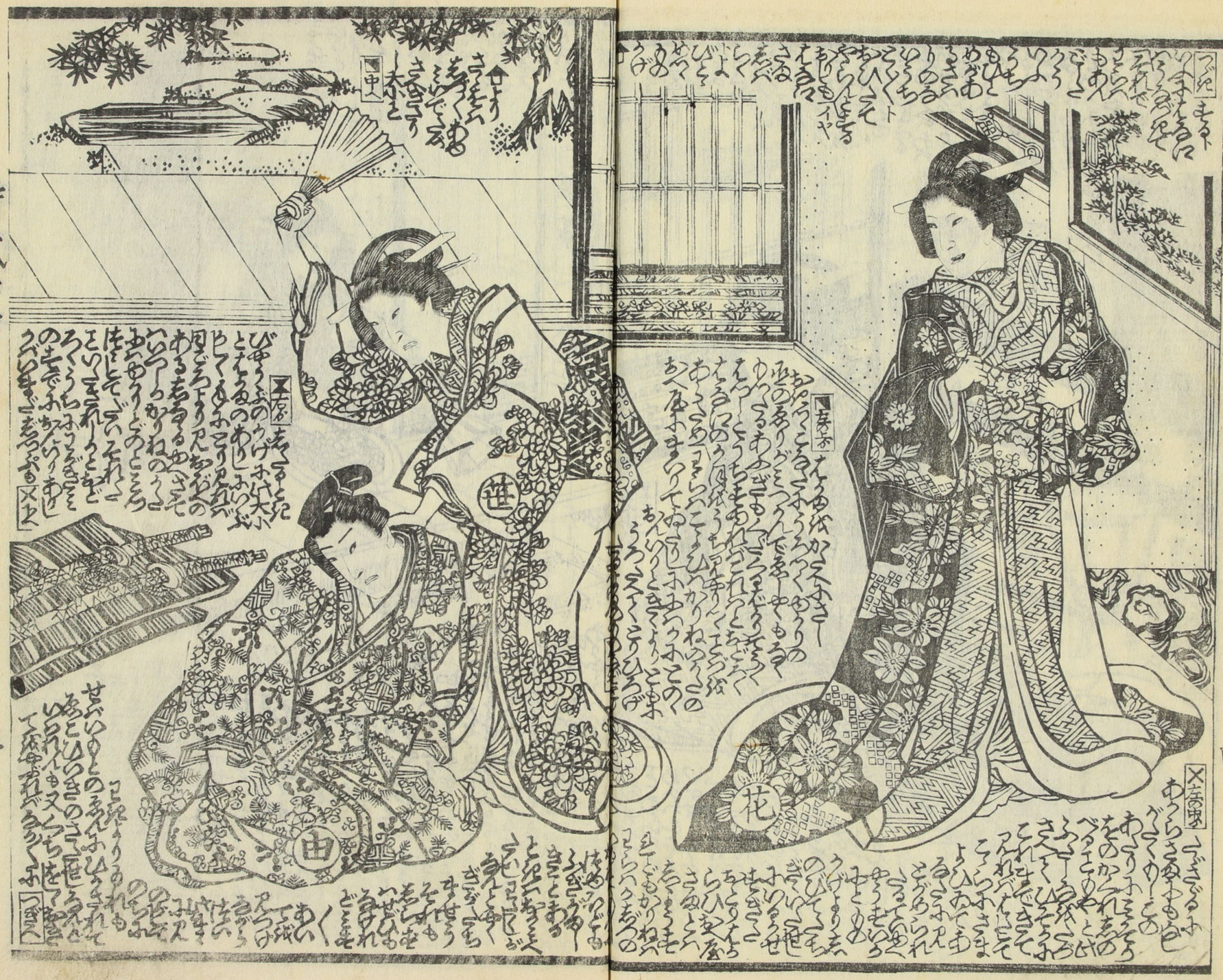
腹拵見透されて謀るべくと思ひの外又計らずの後悔あり。
或ハ手詰の金ゆゑ身売の愁歎晦日の混騰四季折々の移更ゆ
綿入忽地早となる一足飛の早替り無分別ある道行あるべ
胸ゆ嫉妬の焼酎火ゆバせり出せ出世ゆ大願成就と歓べど
奢て次第ゆ身上の廻舞臺ゆあるべ月日ゆ幕のあるべ故
由断の大敵ゆ寄せくる盆と暮との大立廻り借るべの立役も
返せべゆ敵役と朝昏日夜ゆかりゆく真ゆ浮薄の人情と天
道桟敷の真中より常ゆ上覧ゆ一事も善ゆ進む者ゆ必ず
餘慶を下るべ悪人争う餘殃を遁れん嗚呼是戯場も教訓の
捷径開けべゆ史ゆ演ずる絵合巻物の本べゆ名号つ。

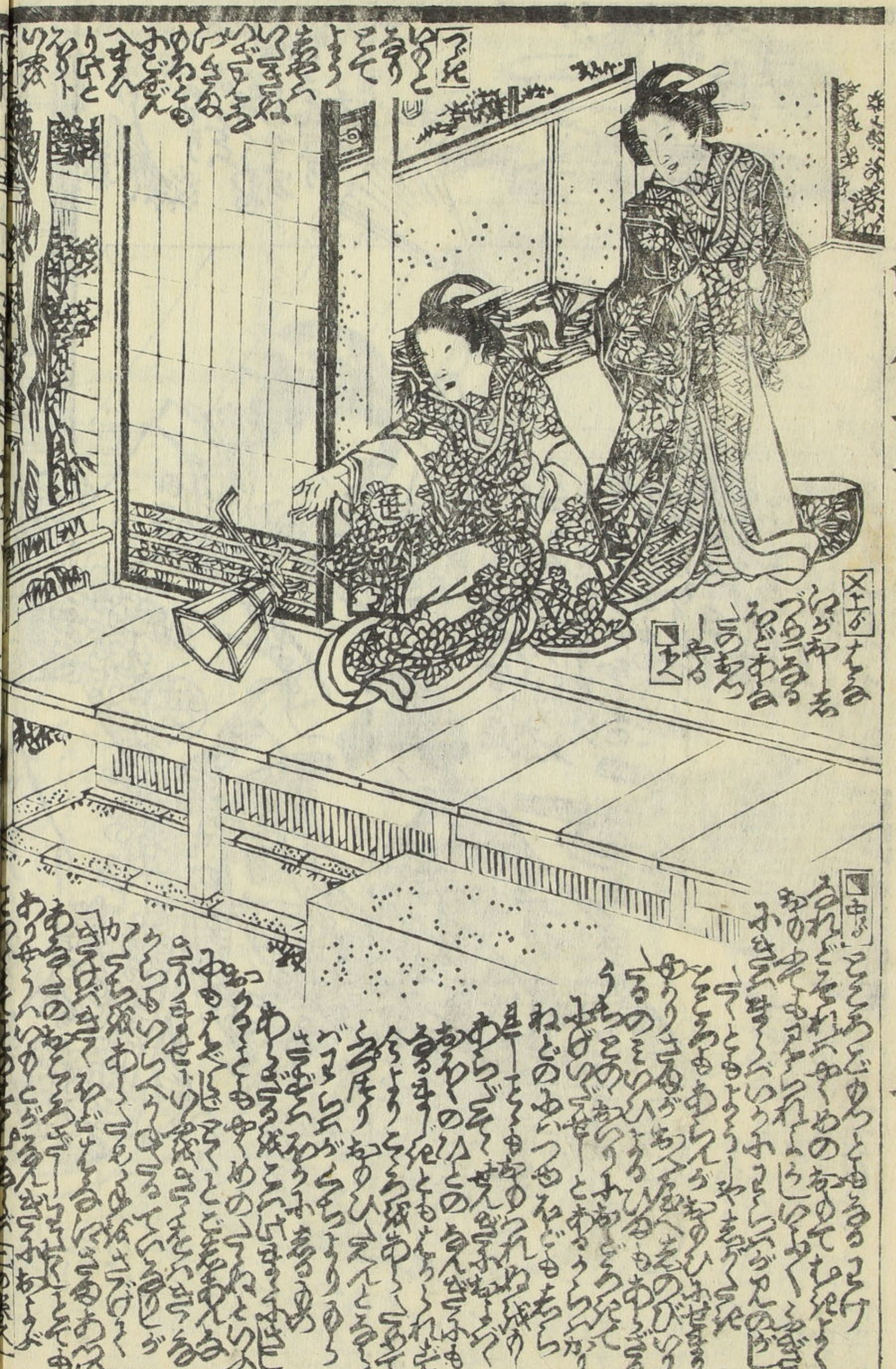
文久癸亥
初春發行

為永春水誌

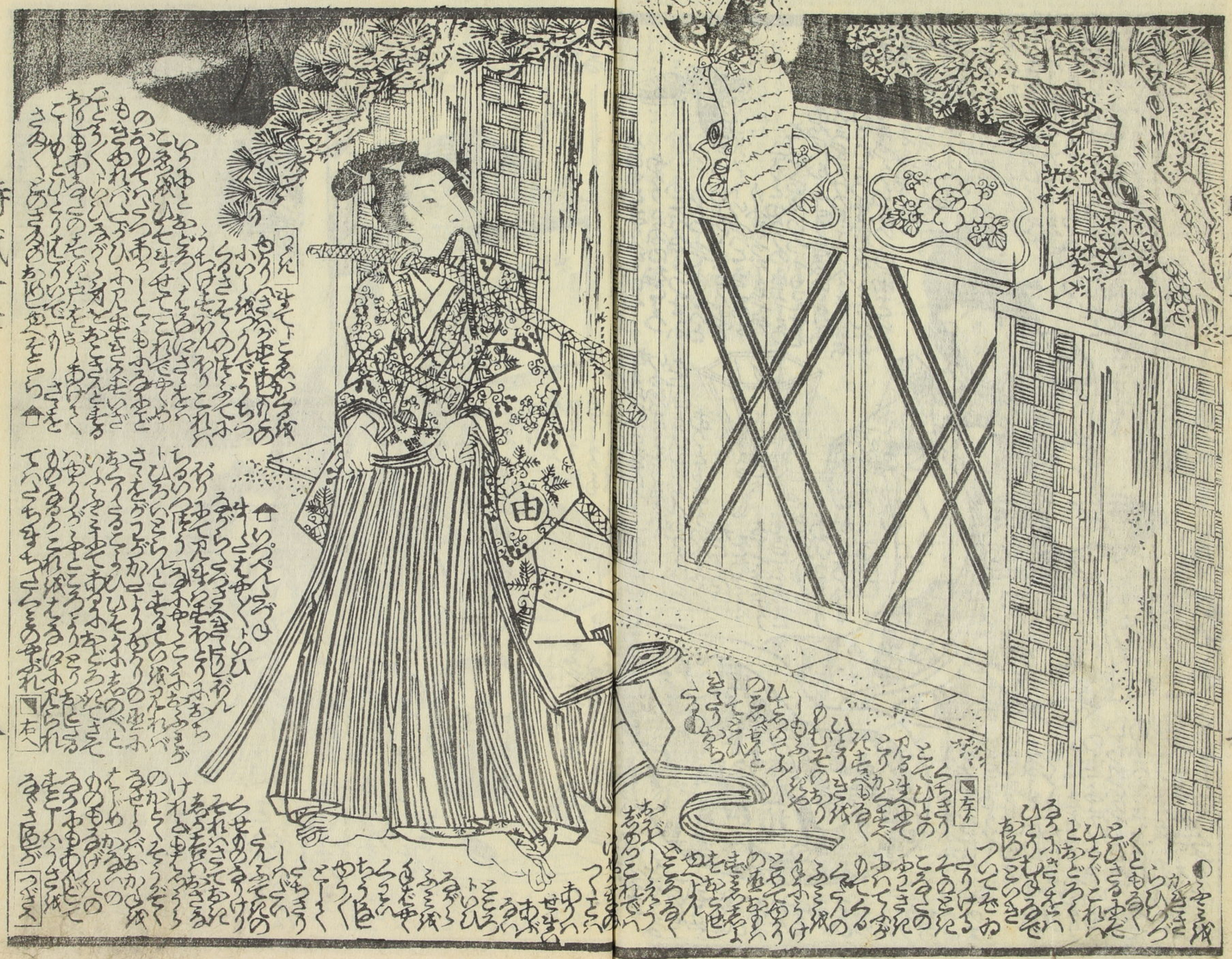


由
花


花
由



笠
花



鹿
右
若
敷
貼

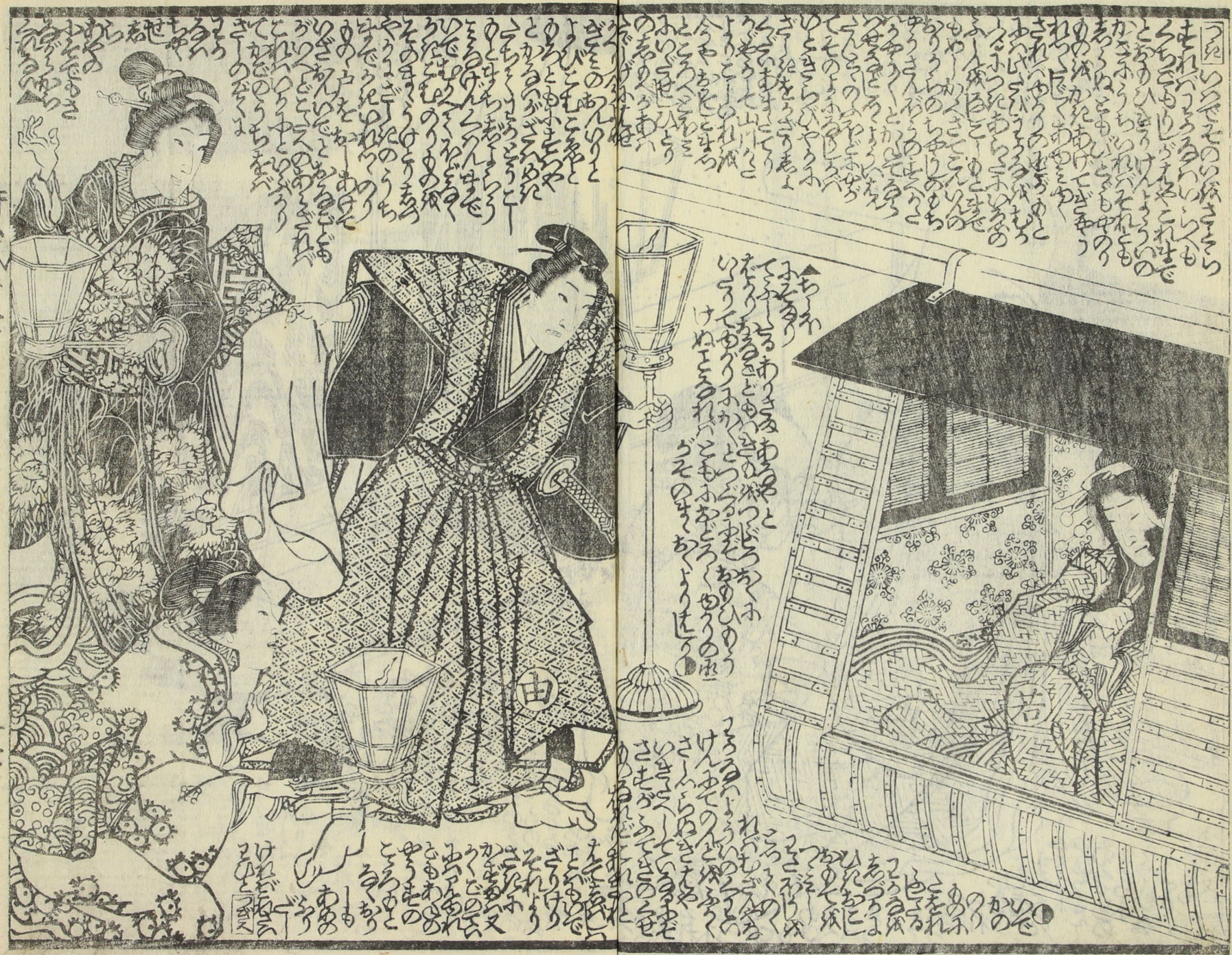
直
鮎

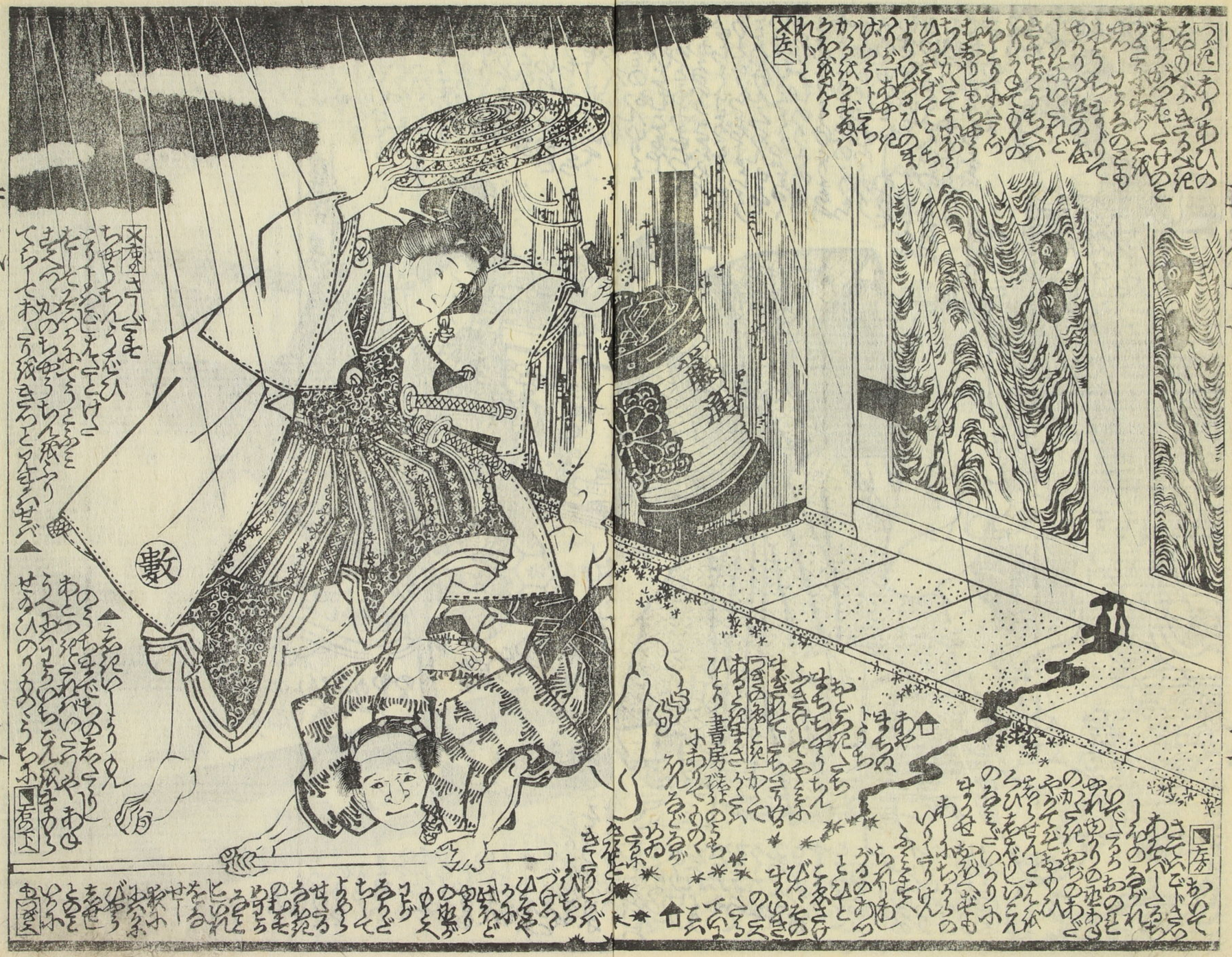
春水作
國貞画
時代世話二人うたがい
三
右
左

直
若
貼
歌

直
貼
若

直
數
點
若


若
由



朝鮮牛肉丸 大包金乗 中包金乗 小包百銅

深崎氏製

春水作 國貞画

浄書 箕田青洲

文久三癸亥年新刻目録

北雪美談 時代加賀實 廿七編 三十二編 爲永春水作 歌川國貞画

雜談雨夜質庫 六編 七編 一陽齋豊國画 出板 門人 國久画

庭訓武藏鐙 應賀作 六編 國貞画 揃

東團扇

地本草紙問屋 芝神明前 若林堂 若林屋与市梓